

嘆きの騎士、地を駆ける

黒プー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

トリスタン持って08小隊時代に転生した人の話。

目次

お試し

1

清書版

二次創作によくありがちな始まり

10

二人だけの戦争 … に混ざる私

17

悪夢

22

お試し

「ふむ……特殊実験機と実験部隊ねえ……やけに少数なのは何故だ？」

「はっ、この実験機は機密事項ですのぞ。」

「ふむ、なるほど。出来立てほやほやをとりあえず運用しようというわけか。まあ上からの命令だ、許可しよう。」

「はっ。ありがとうございます。」

ようやくこの基地まで来れた。転生してからはや16年。ここから08小隊のストリーを間近で……！

「……やけにご機嫌だな？少佐。氷の薔薇なんて呼ばれている君が笑うとは。」

「……失礼いたしました。」

やべ、顔に出た。いけないいけない。私は今無表情系美少女軍人なんだから。ロールプレイちゃんとしないと。

「ふむ、まあいい。では早速で悪いが配置を……」

「司令官殿！ジオンの連中がラインを押し上げてきました！」

「被害は？」

「い、今のところは軽微ですが…。」

「ふむ…？」

え、まっつて。ライン一気に押し上げるってことは…

「… 実験機？」

「ん？何か知っているのか、少佐。」

やつべ… また声出た…

「… はっ。私の耳に入るようなことなので信頼に値するかはわかりませんが。」

「構わん。」

「では。最近この戦線でジオンが巨大な機体を完成させ、実験していると。」

まあ情報網なんてないので原作知識ですが。

「実験か… その試作機のために戦線を押し上げた？」

「ええ、おそらく。」

「なるほど…。」

確かシローとアイナさんがそこで出会うはず… ならファンとしては見逃せないです
すねえ…

「司令。私に行かせてください。私のトリスタンなら、この試作機を迎え撃って見せます。」

「そこまでいうか……わかった。君の配置を考える手間が省けるし、ちょうどいいだろう。」

「はっ！ 失礼します！」

司令に許可を出してもらえた！公認で目の前でアニメの展開が見れる！

「……見逃せないわね」

私は格納庫に駆け込み、目当ての機体に乗り込む。

「ハロ。整備状況は。」

『カンペキ、カンペキ！』

ちなみにトリスタンの整備なんてこの時代にできるわけないので、神様をお願いして整備役のハロをもらってきた。

「ありがとう……よし。行きましょう。」

私は、一般通過ファンとして遠くからシローとアイナを見守るために、基地を飛び出しました。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

『聞いているかい軍曹！ あたしは死なないよお！ 見てるんだな！』

「……この通信、08か。」

カレンさんじゃん。私ああいうイケメンな美女好きなんですよね。

『カレン！ 何をする！』

つまりこっちは……！

「……シロー・アマダか。」

なるほど、今はちょうどアプサラスと接敵したところみたいですね。

あ、ジャンプしたカレンさんがアプサラスに追突された。

『来るなら来てみるおっ！』

お、サンダーズさんの声。

そしてとんでもない衝撃と共に、アプサラスが地表近くに。いやーでつかいなアプサラス。

『俺はっ……俺は！ 死神じゃあないっ!!』

うひゃーかっこいいい！ 最前線が無線届く位置でよかつたあつ！

「……言うな、あの男。私も負けていられないか。」

さーてこっちもお相手のザクをサクサクつとやっちやいましょうかねえ！

『な、なんだこいつ！』

『クソツ、ひくぐああああああつ！』

『隊……あああああああ！』

ふへへ、やっぱザク2ペラペラですねえ、ガトリング売ってるだけでみるみる溶ける。

つて、なんかくるな。

『うおおおおお！』

「ふん。甘いな。」

『ぐあああああつ！』

ヒートホーク片手に突貫してきたザクをビームサーベル二刀で切り裂く。

あつぶね。ニュータイプ能力なければ即死だった。あつてよかった転生特典。

『て、撤退！撤退命令がギャあああああああ！』

『くそ！あいつ容赦ないぞ！逃げろ！逃げるんだあああ！』

「… 引いたか。試作機も… なんだ、逃げたのか？」

あれ、ここじゃなかったつけ、シローとアイナさんの出会いの場所。

ええく見たかったのに…

「つまらんな。一眼見ておきたかったのだが。」

まいいや… 見れないなら帰るか…

|||||

… まつすぐ帰ってたつもりだったんだけど…

「えつと… 君、その服と機体、どこで手に入れたんだい？」

なーんで機体降りたタイミングでシローさんと会っちゃうかなあ？

いやこれ私のですシローさん。

「… 私のものだ。」

「いや、どう見ても連邦のものだし、その制服だつてそうじゃないか。」

「… 私のだ」

あーくっそ！こんな時まで補正かけなくていいっての！

正直に私は軍人でですで解決なのに！

「そうつても君、まだ子供じゃないか。子供がMSを持つてるなんて…。」

「ここにいたんですか。つて、そのガキはなんです？」

「いや、そのMSと一緒にいたんだ。おかしいと思つたんでちよつと話聞いてただけだよ。」

「トリストアンは私のだ。やらんぞ。」

ええいこの口い！ 脳に従わんかいこの野郎！

「… あんた。そのMSがあんたのだつて言うなら、基地職員のカードかなんか持つてるんだらうね？」

「… ああ、確かに。それなら証明になるか。」

ああーそういえばそんなのもらつたな。ちよつと待つてネ。

「… ああ、これだ。」

「んんー… って!?!、しよ、しよ、しよ…!」

「ん? どうした、カレン。」

「少佐殿!?! 何でこんなところに!?!」

あ、そういうえば隊長のシローさんが少尉だもんね、一応私が上なのか。忘れてた。

… てか迷子とか言ったら恥ずかしいねこれ… 言い訳しとこ。

「デカブツの追跡だ。この辺に落ちたように見えたのでな。そちらは?」

「はっ、小隊の観測員2名が行方不明でして。」

ああ、前祝いだって街に出かけて、そこにアプサラスが降りてきちやっただっけ。

暇だし手伝ってあげよつと。

「ふむ。私も手をかそう。何か情報は?」

「い、いえ、少佐殿の手を煩わせるなど…!」

「部下に手を貸すのは上司の務めなのだろう? ほら、教えてくれ。」

「はっ…!」

どうやら途切れ途切れの通信でいくつか単語が聞き取れた程度みたい。

その単語を当てはめると下の村になると… アプサラス落ちたのつてあそこだった

よね?!

「… 捕まったか。」

「はっ!? 今なんと!？」

「デカブツが落ちたのはその町だ。観測は？」

「これからです。」

「よし。なら見にいこう。」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「…！ 少佐、ザクがいます！」

「やはりな。デカブツの修理でもしているのだろう。出るぞ。」

「はい。カレン、ここで待機を。」

『了解。』

急いでトリスタンのところへ戻り、起動する。

『… 本場に少佐殿の機体なんですネ、それ。』

「なんだ。これは私のだ。譲らんど。」

いくらシローさんでもちよつと… それにあなたEz8貫うから…

『いえ。見てくれが私たちの機体とかなり違うもので。何かの試験機ですか？』

確かに。サイズ感とか違うもんね。まあ後の時代の改修機だから当然だけど…

「極秘だ。言えん。」

『… はっ。失礼しました。』

清書版

二次創作によくありがちな始まり

「……と、言うわけで。お主は死んだぞい。」

「何がと言うわけだこの野郎。」

私、□□！名前思い出せない花のアラサー！会社に遅刻しそうでパン啜えて大慌てで走ってたら曲がり角でゴツツンコ！なんとその運命の相手は異世界転生装置「T・U・R・C・K」だったの！

それで目が覚めたら目の前には神様が！私、これから一体どうなっちゃうの？次回、打ち切り！□□先生の次回作にご期待ください！

「クソがああああああああ！」

こんなクソゲーあってたまるか！もうちょっとでガンダムの新作アニメくるところだったのに！なんでよりによって私なの！

そこでお茶吹いてるクソジジイ！ほんとに許さんからな！

「ゲホっゲホっ……全く、急にキレ散らかすんじゃないわい……」

「どうしてくれるんですかー！今すぐ帰りたいんですけどー！」

「んなこと言ってももう事後じゃし…。」

「オフパコした後責任取れなくなつてビビつてる男みたいに言うんじゃないわよ！ほんとにどうしてくれんの！責任とつてよね！」

「つ、ツンデレ？」

「んなわけないでしょボケジジイ！」

ほんとにこのクソジジイいいいいいい！

私がキレ散らかしていると、クソジジイはあらためて椅子に座り直し、もはや立て直し不可能なほどに吹き飛んだ貫禄を戻しながら言った。

「全く…お主の大好きな08MS小隊の時代にちーととやらを渡して送つてやろうと思つたのに…残念じゃのう…。」

「行きます。いかせてください。さつきまで失礼なこと言つてすみませんでした。」

「お主マニユピレーターのモーターつけ間違えとらんか？ドリル用のやつに。」

転生とかクソほど興味なかつたけど08MS小隊と一緒に空気吸えるなら話別だが。てか最初から言えよ。

「ま、まあええわい。とりあえず行き先は決まつとるじやろ？じゃあほれ。」

とクソジジイが手渡してきたのはダーツ。

「え、何すんのこれで。あんたに向かつて投げればいいの？」

「いや待って待って！違うわい！前にみる！」

ジジイが指差す方向を見ると、そこにはくるくる回転するのがある。

あー…なるほど？

「と〇ろさんのそこるところ！だかなんだかでやってた感じのダーツね？ダーツで行き先決めるやつね？」

「番組間違ってるんじゃないかの…？大体合ってるけど。そう言うことじゃ、あそこにはMSの名前が書いてあっての、刺さったMSがお主の愛機じゃ。」

「え、じゃあユニコーンとかあるの？」

「当たり前じゃろ。」

「プロガンは？」

「一応あるぞい。」

「ストカスは？」

「ニツチなところ攻めるのお…あるぞい。」

「ストライクフリーダムは？」

「アナザーは追加めんどいからないぞい。」

「クソが。」

ストフリでイキリトムーブしたかったのに…まいいや。とりあえず投げよ。

「せえええええいつ！」

私が投げたデータは見事に的に刺さり、それと同時に的回転が停まつて的に書かれた文字が見えてくる。

「うわほつそ。1機体に対するスペースほつそ。」

「しようがないじゃろ、今描かれてるガンダム作品の量産機から主役機まで詰め込んだらああなっちゃったんじゃ。おかげで文字書けないから色で判別する羽目になったわい。」

ほれ、とジジイが機体の名前と、横に色が書かれた分厚い図鑑を引っ張り出してくる。

「うわ分厚いな。六法全書かよ。」

「夜通し作ったわい。」

「お疲れ。つと。この色は？」

色は白色に紺色と赤が混ざった感じ。何これ。

「まつとれ、えーこの色はー..」

ジジイが図鑑を捲りつつ、色を確認する。

「ふむ、それはトリスタンじゃの。」

「え、何その機体。」

「トリスタンはトワイライトアクシズという作品の主役機での、アレックスの改修機

「じゃよ。」

「はへー。」

なるほどアレックスの。

「いやそれチートじゃん。時代背景的に。」

「そりゃ特典なんじゃからチートじゃなきやいかんじやろ。」

「確かに……って、整備とかはどうすんのさ。」

現地の人に見せるわけにはいかんぞ？

「安心しろ、整備用にハロを用意しとく。射撃補助から機体整備まで全部お手のもの
スパーチートハロじゃ。」

ジジイが指パツチンをすると、ボンつと言う音とともにハロが出てきた。

「ヨロシク、ヨロシク。」

「お、おう。ヨロシク。」

「さて、準備は万端じゃな？」

「え、まあ。」

「じゃいつてらっしゃい。」

「はっ。」

いつの間にかジジイの横に垂れてきた紐をジジイが引っ張る。

すると私の足元がパカッと開き、私は下に落っこちるのだった。
「覚えてろクソジジイいいいいいいいい！」

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

「……キロ、オキロ。」

「……んー……」

「オキロ、オキロ。」

「はっ!？」

気がつくとは私は、何かのコックピットに乘せられ、宇宙空間を漂っていた。

……宇宙？

「ちよ、なんで宇宙なの!？」

「1ワ、1ワ。」

あー、そういえば宇宙スタートだったね1話目。

その時、首筋がゾゾゾつとする感覚と共に、頭に電流が走る。

「うっ…… 何この感覚!？」

「ニュータイプ、ニュータイプ。」

「…… 至れり尽くせりだなあのジジイ。」

なんか負い目でも合ったのだろうか。

そんな呑気なことを考えていると、機内に警告音が流れる。

「っ、来たっ!？」

全天周囲モニターを確認すると、背後からザクがヒートホークを抜いて向かってきていた。

「舐めプか？ 舐めんなよゲーマーを!…元だけど!」

私は機体を動かし、ザクの倍近い速度で動き、後ろをとって切り捨てる。

「うひゃー。やっぱ早いな、さすがアレックスの改修機。ザク2改で相手にならないレベルの機体改修してることはあるね。」

爆散するザクを見届けていると、右側で爆発を感知する。

「ん?…あのオレンジボールは…?」

よくみたらオレンジボールとザクが殴り合いをして…爆散した。

「うわ、あれシローとアイナ様か、マジでよくやるなーあんな棺桶でザクに立ち向かうとか。」

「タスケロ、タスケロ。」

「そうだねー、アイナ様はともかく、シローは回収してやりましょうか。」

私は爆発地点であった近くの廃船に、スラを向けるのだった。

「あれっばいね。よーしシロー拾っちゃうぞー！」

「ソクドオトセ、オトセ」

やべ、あんま吹かしすぎると轢き殺しちゃうか。

私はスラストを一瞬吹かすだけにとどめ、その余力で二人に近づいていく。すると二人はこちらに気づいたのか、片方が離れていく。

「・・・ハロ、抱き合ってるシーン写真撮ったか」

「アタボーヨ、アタボーヨ」

「よくやった」

バチこり尊いシーンの写真を収めたことを確認しつつ、コックピットを開いてシローを迎え入れる。

「ありがとう、たすか・・・って!? なんだこのコックピット!?!」

「あ、どーも。花火バッチリ見えましたよ。」

「そ、それはよかったんだけど・・・」

どうやらシローは全天周囲モニターに困惑してるようだった。

そらそうでしょ、これできるのZ時代とかそこらだからね。

「あー、これ一応上層部の機密なんで、見なかったことにしてね。言いふらしたら銃殺刑よ。」

「うええええ!」

「ドンマイ、ドンマイ」

「そうそう、私に救助されたことを恨んでねー。あ、旗艦は?」

「あ、ああ。えー場所が…」

とりあえずついでで私も旗艦に乗せてもらうため、シローを送り届けることにした。

「そういうえば、君随分… その… 若いね?」

「ああ、まあそうですね。色々あつたんで。」

「階級は?」

やっべ。い、今さっきそこで起きたばっかりなのに階級なんてねえよ!でもないって

言ったら相手軍人だしそれはそれでまずい…! ど、どどどうしよう…!

「え… つと、ハロ!」

よし、押し付けるか。

「シヨース、シヨース」

「…だ、だそうです…」

「…え?」

お、おいいい! ハロ! なんか疑われてるって! お前適当な階級言つてない!?

存在しないやつとか!

「ショーサ、ダガ機密試験機ノパイロットダカラ階級テキニハ実質大佐ダ。ホレ徽章。」

急に流暢に喋りますねあなた。てかなんだよその徽章。私初めて見たぞ。

おいやつば失敗してねえ!? シロー震えてんぞ!?

「た...」

... た?

「たつた大佐だとは知らず! ご無礼を!」

あれなんか思ってたのと違う。敬礼綺麗だな。

「あ、はい。まあ... 大丈夫です。」

「あ、ありがとうございます!」

「敬礼もやめていただいて...」

「はっ!」

「とりあえず案内を...」

「了解です!」

ま、まあなんかうまく行ったっぼい? よかった。

... てかなんも言わずに話進めたあのポンコツボールには説教だな。許さん。

そんなこんなで私は、船に向けてスラスターを吹かすのだった。

... なんか前回も同じ締め方してなかった?

悪夢

夢の中で、私は狙撃手俺をしていた。

ザクⅡに乗り、仲間と共にとある中域を守っていた。

だがそんな時、ジャズと共にやってきた悪魔が仲間を殺した。

奴だけは殺す。

逃さない。

確実にその頭に弾丸を。

◇

「……っ！」

ドス黒い感情を感じると共に、私は思わず飛び起きる。

え、なに今の。

「少佐？ どうしました？」

「あ、いや、なんでもないです。」

やべ、隣にシローいた。

てかこんなアホみたいに揺れる車の上でよく寝れたな私。

「オキタ、オキタ」

「おはようございます、少佐。」

「あー… シローさん？ 私どのくらい寝てました？」

シローさんをサルゲツチュとして船に連れ帰ってから記憶がないんだけど。

もしかしてこれさ…

「さんは必要ありませんよ、少佐殿。… 船に帰還した後からずっと寝ていらしたので、4時間ほどでしょうか。」

「グツスリ、グツスリ」

「… ツスー」

めっちゃ寝てるやんけえ！ なにしてんだ私!?

「… 待って、船から車に下ろす時って…」

「ああ、まだ寝ていらしたので抱きかかえさせていただきました。あ、別に重くは…」

「… アア」

重い軽い以前に乙女の尊厳が…

恥ずかしすぎる…

「… 次からは叩き起こしてください…」

「りよ、了解しました。」

「ネボスケ、ネボスケ」

うるせえぞハ口。今度余計なこと言ったらその口縫い合わすぞ。

「…とところで。これ今どこ向かってるんですか？」

「ああ、我々の配属先であるパソ基地に向かっています。そうだろう、えー…」

「カレン・ジョシユア曹長であります、少尉殿。はい、パソ基地です。」

「ああ、カレン。ありがとう。」

あ、やっぱカレンさんだったのね。てことはお隣がエレドアさんか。

ってあれ？サンダーズさんとミケルくんは？

「彼らなら後ろの車でついてきてます。」

「…私のせい？」

「いえ、そんなことは。」

本来なら1台だけだったはずなんだけど…これ完全に私のせいだよ。ごめん後

ろの二人。

「…あ。あれって。」

「モビルスーツですね…陸戦型か。」

はへーあれが陸戦型ガンダムか。ファーストガンダムとはまた違うかつこよさが
あるなあ。

あつそうじゃん。別に考える必要ねーじゃん。シローが原作で言ったこと言えばいいんだし。

「よし。大丈夫そう。」

「おいおい、そんなんで大丈夫かよ、しよーき殿。」

「…… エレドア。」

「おー、なんだいカレン？」

あ、ゲンコツ食らった。痛そう。

「つたく、上官に失礼な態度とつちやダメに決まってるでしょうが。なにやってんだいこのバカ。」

「イツテエ……」

「…… さ、着きました。どうぞ。」

カレンさんがわざわざ開けてくれたドアから降り、体を伸ばす。

「んー、いい空気ですね。エアコンとは風が違う。」

「慣れると暑いだけです。さ、こちらです。」

そのままカレンさんについて行き、基地司令であるコジマ中佐さんのところまでくる。

本当に扇風機だけなんだなこの人。

「…ん？君たちは？」

「…はっ」

やべ、私だった。

まあこの時のために偽名をハ口と考えたしいけるいける。

「あ、えっと。クレア・ルイス少佐、第08小隊着任の挨拶に参りました。」

「ああ、君が噂の。軍にスカウトされる前、乗っ取ったザクIIで敵を3機撃破したというのは本当なのかね？」

「あ、えっと…」

待ってなにそれ、初耳なんだけど。なにしてんだあの神様。
クソジジイ

「ホントウ、ホントウ」

「ちよつ、ハ口っ！」

馬鹿野郎お前なんてことを!?

「ほう、噂は事実だったか…。まあいい、確か君は試験機の実験のために派遣されたんだったね？」

え、乗り切れたんだけど。追求しないのね…

「ええ、まあ。」

「…よし。では予定通り実験機の試験を。事前に言っておいた通り、08小隊を君の

下につける。頑張ってくれたまえ。」

「は、はっ。」

「よろしい。では任務を。」

あ、任務はやっぱりあるんですね…。そりゃ小隊だしなわけないか。

「君たちも、ジオン側が秘密工場を隠し持ったという情報は耳にしとるだろう。しかしなにをしようとしているのか皆目わからん。また、絶対防衛線が我が方に伸び出すという事実により、我々は動き出したというわけだ。」

そうそう、こんな感じだったよね台詞。初めて聞いた時前置きいいからさっさと要件話せて思ったから記憶にある。長いわ。

「ま、いずれにしても、この防衛戦を突破し、敵を叩き潰さねばならん。」

まだ続くの。

「それから：ジャングル内の民間人は刺激しないこと。まあそんなところだ。後はカレンから聞き給たまえ。いいな？ カレン。」

「はっ！」

「では頑張ってくれたまえ。」

そう言つて基地司令は席を立ち、どこかに行つてしまった。

…ひとまず終わりかな？

本当話長いし結論はカレンさんに聞けだし……なんだったんだあの時間……

「……ふう。」

「しよ、少佐殿……」

「……ん？」

「す……」

「す？」

「すごいですね！ 鹵獲したザクで敵を3機も撃破なんて！ どうやったんですか!？」

待て、ミケル少年。頼むから純粋な目で嘘の経歴について聞くな。答えにくくなるんだ。

「えっ、と……あの時は夢中だったから……」

「覚えてないんです？ 残念だなあ……でもすごいですよ！ 本当に!」

よし、ガンダム1話で主人公が無双した後に言いがちな台詞で乗り切ったぞ。便利だねこの台詞。

「……さて。我々の任務について、説明してもよろしいですか？」

「あ、うん。どうぞ。」

「では。」

カレンから任務について説明を受ける。

ざっくりいくと、前線の維持とジオンの秘密工場を見つけて壊せ、って感じだった。

ここ劇中だと描写なかったけどまあ当たり障りない感じの内容だね。

「… 以上です。何か質問は。」

「大丈夫です。理解しました。」

「では、我々のキャンプの方へ。車が用意してありますので。」

ようやく説明が終わり、降ろしていた腰を上げて車の方へ向かう。

車にはジダンののじっちゃんとエレノアが座っていた。

「ほー、お前さんが隊長かの？ ずいぶん若いのお、大丈夫かあ？」

そう言っつてジダンののじっちゃんは… シローに話しかけてた。

… なんだこのおっさん… (キレ気味)

「いや、俺は隊長じゃないんだけど…」

「んん？ となると誰が？」

「… 私、ですけど。」

「はあ!! お主が!?! まだガキじゃないか!?!」

「これでも少佐です。」

「佐官でしたか、こりゃ失礼いたしましたへへへ」

手のひらドリルだなこのじいちゃん。

「あの……少佐殿？」

「いいですよーだ。別にちびっ子すぎて上官だつて思われなくても気にしてないですよーだ。ほら、さっさと車出してくださいよ。」

「はいはい、もちろんですともへへ……」

ほんと、ガキで悪かつたなガキで。

◇

「……これが、少佐の機体ですか？」

「ええ、まあ。トリスタンと言います。」

見たことない機体だ。武装も何もかも、既存の連邦機とは違う。

特にビームライフルの形状。ジムのビームスプレーガンとはサイズや形状からして全く違うものだ。

「こいつはどこで作られたんですか？」

「機密です。申し訳ないですが、部下であるあなたたちにも話せません。」

パイロットであるクレア少佐に聞いても、突き放されるように返される。

「そう、ですか。」

「……シローさん。興味があるのはわかるんですが、色々と理由がありまして。整備も私とハロだけで済ませたいので、ついでに整備班の方に伝えてもらえますか？」

俺の顔を見た後、彼女は目尻を下げながらそういった。

「わかりました。」

「… ありがとうございます、シローさん。」

そう言つて彼女は整備をするためか機体に近づいていった。

これ以上見ているわけにもいかず、少佐の言葉を整備士に伝えるため、急いでその場を離れる。

… そういえば少佐、何か少し悲しそうな顔をしていたが、気のせいだったか。